

# 新政府制度の三大改革

欧米諸国に對抗する近代国家を建設するため、政府は

**富国強兵** をスローガンにさまざまな政策を進め、経済の発展と軍隊の増強をめざしました。

余談

## 富国強兵に至ったエピソード

岩倉具視を中心に、伊藤博文、大久保利通、木戸孝介ら政府の重鎮たちは、アメリカとヨーロッパ人使節団として訪問しました。

(目的...  
・ 不平等条約の改正  
・ 欧米諸国の視察)

訪問には歓迎してくれたが、いざ交渉に入るとまったく相手にしてもらえなかった。

余談

その時、イギリスでお金を銀行に預ければ利子がつくと聞いた一行は、大金(現在の価値で5億円ほど)を預けたが、ロンドン滞在中にその銀行が倒産して、預けたお金をすべて失ってしまいました... (多分金融に疎かったので詐欺にあったのかも)

ドイツ帝国で鉄血宰相といわれたビスマルクと会ったとき、こう言われました。

「あなたたちは国際法の導入を議論しているようだが、弱い国がそれを導入したからといって決して権利は守られない。なぜなら大国は自国に有利な場合は国際法を守るが、不利な場合は軍事力をもって外交を展開する。だから日本は強い国になる必要がある。」

使節団一行はこの言葉に大きな衝撃を受け、「富国強兵」という考えを強くもった。